

2026年2月15日 第二礼拝

説教題『畏れるな、語り続けよ』使徒18章1～11節

主任牧師 加藤 誠

「恐れるな。語り続けよ。黙っているな。わたしがあなたと共にいる。だから、あなたを襲って危害を加える者はない。この町には、わたしの民が大勢いるからだ」(使徒言行録18章9～10節)

今朝の使徒18章が私たちに示していることは、弟子たちの福音宣教の働きは、困難に出会う度に「新しい芽」が吹き出していったということです。弟子たちは祈りを込め、心込めて福音の種を蒔くのですが、その種を荒々しく踏みつぶし、蹴散らすような妨害が次々に起こる。読んでいると胸が痛み、悲しくなり、腹が立ってきます。しかし神の働きは不思議です。福音の種が人々の憎悪や怒りを受けて踏みつけられる中に、弟子たちが思ってもいなかった「新しい芽」が芽吹き成長していくことを、今朝も使徒言行録は私たちに語りかけているのです。

18章の冒頭でパウロはコリントの町にたどりつきますが、このときパウロは直前のアテネ伝道が失敗に終わり、ひどく落ち込み、自信を無くしていたようです(Ⅰコリ2:3参照)。そのコリントに、つい最近ローマから追放されて流れついた一組の夫婦がいました。パウロと同じテント造りを生業とするプリスキラとアクィラです。どうやって三人は出会ったのでしょうか。町の市場にテント造りの店を出していた夫婦のもとにパウロが偶然通りかかり、同じユダヤ人、しかもイエス・キリストを信じている者同士と知って喜びあう三人の姿を想像します。パウロもプリスキラもアクィラも、それぞれ失意と落胆の中で流れついたコリントでしたが、福音宣教の主人公である神は、この場所に新しい出会いを用意してくださっていたのでした。

プリスキラとアクィラは、終生パウロと深い信仰の絆で結ばれた同志となる夫婦であり、その出会いに神の確かな後押しを確信したパウロは、安息日にユダヤ人たちが集まるユダヤ教の会堂でイエスこそ聖書が預言してきたメシアであることを力強く語ります。が、またもやユダヤ人の激しい反発に遭い、彼らは会堂での伝道をあきらめて、お隣のティティオ・ユストの家で集会を始めていきます。「家の教会」の始まりです。歴史的にキリスト教会が礼拝堂専用の建物を持つのは百年くらい後だったようで、それまでは教会は「家の教会」でした。厳しい迫害の中、自分の家を開放することは大変なリスクを伴うことでした(17節)。今の私たちは教会に礼拝堂があるのは当たり前で、「礼拝堂がここにあるから礼拝がささげられている」と勘違いしていますが、しかし出来事としては「礼拝をささげる人々が先に起こされて、そのあと礼拝堂ができた」のです。まず人々が自分の家を開放して隣人を招き入れ一緒に聖書を読む中に、教会が生まれていった事実、改めて自分の信仰を厳しく問われました。「お前はここに礼拝堂があるから礼拝をささげているのか。礼拝堂がなかったらお前の信仰はど

うなるのか」「お前自身の家がまず人々を招き入れ、一緒に聖書を開く場所となる。そのことをどれだけお前は祈っているか？」と。かつての戦争中、大井教会の礼拝は中止を余儀なくされ、強制疎開のために教会員たちは地方に散らされましたが、その疎開先でそれぞれの家庭が聖書を開き、祈りを合わせる場となったのでした。礼拝堂があるから教会があるのではない。信徒一人ひとりが／その家庭が、それぞれの場所で主を礼拝する場となる中に教会は形づくられる。まず私たち自身が「主を礼拝する宮」とされる。そのように御言葉を聴き続ける信徒一人ひとりによって教会が形づくられることを覚えたいのです。

今朝もう一つ、使徒 18 章のコリント伝道から大切に受けたいと思うのは、パウロが幻の中で主から語られた言葉です。「恐れるな。語り続けよ。黙っているな。わたしがあなたと共にいる。…この町には、わたしの民が大勢いるからだ」（9～10 節）。主は同じ言葉を、今日私たちに語りかけておられるのではないのでしょうか。私たちは果たして主の語りかけをどこまで真剣に受けているのでしょうか。語ることを恐れるわたし、黙ってしまうわたしがいます。「わたしがあなたと共にいる」。この主の言葉を、自分の慰めにだけに受け取って「終わり」にしていないのでしょうか。この主の言葉は、私たちが主イエスの証し人と立てられていくための祈りが込められた言葉です。

「慰められて終わり。そのまま座ったまま」ではなく、「先立つ主と共に立ち上がり遣わされていくための言葉」として聴いているのでしょうか。また「この町には、わたしの民が大勢いる」。この言葉をどう聴きますか。旧約聖書の「わたしの民」は「イスラエルの民／選ばれし民」のことであり、異邦人はそこに含まれませんでした。けれども主イエスは「わたしの民」の狭い理解を打ち壊されて、イスラエルだけでも、律法をきちんと守っている民のことでもない、「すべての民」が神によって「わたしの愛する子」と呼ばれ祈られていることを教えてくださいました。さらには十字架で、イエスに唾を吐きかけ、罵倒している人たちも「すべての民」に含まれることを示されました。ですからコリントでも、イエスを信じようとしている人々だけでなく、口汚くパウロたちを罵る人たちも含めて「わたしの民」と呼ばれ、祈られていることを覚えたいのです。今は確かにパウロに危害を与えようとしているとしても、その彼らがわたしに立ち帰る日を祈り続けているのが十字架の主だからです。そのゆえに主は「恐れるな。語り続けよ。わたしはあなたと共にいる」とパウロを励ましたのでした。人間の権力は「国民の利益」を脅かす存在を「敵」と見立てることで自らの権力をより強固なものとしようと企てます。歴史的に日本の国の為政者たちもそのような企てを常に腹の中にもってきました。けれども、そのような人間の企てに乗っかることなく、また恐れることなく「十字架の主の福音に固く立ち続けよ」と、聖霊は今日も私たちを励まします。この十字架の主の御声に聴き従っていきましょう。